東北大学

令和4年度　一般選抜入学試験　個別学力試験
出題意図（英語）

【前期日程】

大問１

出題意図

　地球温暖化が原因で、現代社会において世界規模の問題になりつつある「環境難民」の問題を題材に、移民を受け入れる都市がとるべき対策や、国や団体が予算をどのように振り分けるべきかなどの課題について論じた英文です。現代的な課題についての英文から、全体の論旨を理解できているか、また、語彙や文法知識に立脚した個々の文章理解ができているか、理解した内容を日本語で適切に表現できているかを問う問題でした。

講評

問１「環境難民」の定義を問う問題でした。第１段落の最後の文が environmental migrant の説明になっているので、ここを正確に要約すればよいところですが、「環境」とは何のことなのか、「難民」とはどういう状態の人々なのかを正確に説明できていない答案が目立ちました。移住の原因（環境変化、気象変化など）が書かれていない答案や、「難民」について、「移動する人」と置き換えている答案や、「難民」のままにしている答案などが、これに当たります。

　(2) 第２段落の前半で、人々が別の場所に移住しなければならなくなる理由（移住が不可避な状況）を詳しく説明しているので、その内容を、解答欄の枠に収まるように要約できるかどうかを問う問題でした。下線部の下の Meyerhoff 一家の状況を和訳した答案が多く見受けられましたが、彼らはまだ難民ではないので、その部分 のみ をいくら正確に和訳しても、「どのような状況で環境難民になるか」を説明していることにはなりません。また、(1)と(2)を区別して解答することが難しかったようで、(1)と(2)に対して同じ内容を書いている答案や、両者の区別をつけるためか、わざわざ片方の解答欄に第３段落の内容の一部を含めているものも多く見受けられました。

問２　環境難民が生じる理由についての専門家の見方が、かつてと現在でどの

ように変化したかについて、それぞれ、同じ段落内の下線部(B)の前の部分と後の部分から適切に要約ができるかどうかを問う問題でした。

「下線部の前後をまとめればよい」という点で誤りを犯している解答はまずなかったものの，(A) that view が何を指すか、(B)変化してどうなりつつあるのか、という点の該当箇所を正確に押さえられていない受験者が想像以上に多かったように見受けられました。また、該当箇所を和訳する際にも、正確に和訳できている解答は多くはありませんでした。特に、failure of A to do とか inability of A to do といった（日本語との比較で）英語らしい表現が正確に解釈できておらず、たとえば「Aが失敗した結果～する」となっている答案が多数ありました。また、along with という語句が何と何を並置しているのか理解できなかった答案や、no amount of ~という語句の意味がわかっていないと思われる答案などが多く見受けられ、たとえば「インフラをなくせば気候変動を止めることができる」といった誤訳がありました。また、migration becomes the adaptation strategy で不定冠詞の a ではなく定冠詞の the が使われているのに加え、第 4 段落最後のセンテンスで the final destination と final という形容詞が使われていることの意味を踏まえた上で、本文全体の内容にも注意を払って欲しかったところです。

問 3　直後の段落の内容を簡潔に要約した上で、asset と burden の訳語も踏まえて、その対比を、本文に即して説明することができるかどうかを問う問題でした。

ここでは、asset と burden がそれぞれ何を指すかが明確に書かれていない解答が目立ち、両者の関係を逆にとらえている答案もありました。また、設問には「第 6 段落の内容に即して」とありますが、第 5 段落のみに基づく解答が散見されました。また、第 6 段落にある語句を用いているものの、文章として意味のわからない、もしくは意味の取りにくい解答が少なくありませんでした。また、比喩として書かれている「塩害」を読み違えて、実際に起こっている環境問題と捉えてしまった答案もありました。

問 4　都市への適応のための対策と炭素の放出を減らす対策のどちらを優先すべきだと述べているかを本文から正確に読み取った上で、①には名詞が入ること、② には動詞が入ることなど、文法知識も動員して英文をパラフレイズすることができるかどうかを問う問題でした。

問題文を含む発言およびその直前の発言は決して難しい言い回しではなく、当該段落中の単語を使用するという指示もあったことから、容易に解ける問題であったと思われます。しかし、問題文の指示に従わない例（特に、

adaptation→adaption）や、単純なスペルミス（emission→emmission、adaptation→adoption; adoptation、reduce→reduse）が少なからず見られました。また、emissions の複数語尾の-s が抜けている場合、厳密には不可算名詞となり「排出」を意味し、「放出物、放出量」を意味する emissions とは別の語彙になってしまうことにも注意してほしいと思います。

問 5　本文全体を漏れなく読んだ上で、その内容を理解し、問題の選択肢がその内容と一致することを述べているか否かを適切に判断できるかどうかを問う問題でした。

正解は、（イ）と（ウ）でした。

（ア）については、第２段落の内容から、Meyerhoff はまだ自分の家を失っているわけではないので、誤りと判断できます。(イ）については、第３段落の内容から正しいと判断できます。(ウ)については、第５段落の内容から正しいと判断できます。(エ)については、第７段落に more investment is needed とか、international climate funds should play more of a role と書かれていることなどから、本文の内容と合致しないと判断できます。(オ)については、第９段落に、Bangladesh や Kenya の代表の考え方の記述がありますが、その中に、We need money for adaptation; that should be the priority.とあることなどから、本文の内容と合致しないと判断できます。(カ)については、第 10 段落で、Oucho が、We don't want to see cattle herders begging on street corners because they don't have the skills to thrive in the city.と発言していますが、これが、都市で生きる技術を持っていない人は移住してきてほしくない、という趣旨でないことは、同段落の最後の３行からわかります。

総合得点の高い受験者ほど、この問題の正答率も高い傾向がありました。

大問 2

出題意図

Penfield, E. Short Takes: Model Essays for Composition, 2nd ed.からの出題でした。比較的読みやすくまとまった文章ですが、人類による文字の発見から現代の宇宙探査にまで展開する話を正確に理解できたかどうかがポイントになります。

講評

問 1　文章の出だしで、人類が書き言葉を発見するまでのエピソードが語られています。文中の出来事を時系列に整理して理解できるかを問う問題でした。

正解は、① イ　② ウ　③ ア　です。

ほとんどの受験者が正答できていました。

問 2　一文の和訳が求められていますが、この文を正確に理解するためには、段落全体の理解が必要です。

それほど難易度の高い問題ではなかったはずですが、「It が指すものを明らかにして、日本語に訳しなさい」という設問であったにもかかわらず、下線部の内容の「説明」をしたり、余計な情報を付ける解答が少なからずありました。中でも、It の指す内容（＝writing）を訳す上で、early people would learn を writing だけにかけた誤読が多く見受けられました。また、much further の much や、mere といった基本的な文法や語ができていない答案もありました。farther は further ではなく、また次に farther in distance and in time とあるので「空間的・時間的に遠く離れて」という意味なのですが、そのようにとれない解答がありました。

問 3　この文章には、対比による表現がいくつか出てきますがこれもその 1 つです。両者がどのように異なるかを明確に理解し、表現できるかがポイントです。

この問題は、解答の形式と解答する箇所が限定されていたこともあり、比較的よくできていたと思われます。特に syllabic system についての説明は正答率が高かったように見受けられました。ただし、"correspond to"（～を～に対応させる）の「～を～に」を逆に捉えており、「記号に対して音が作られた」と捉えてしまった解答が目立った印象です。また全体を通して、「記号が音を表現する」のではなく、「記号を音で表現する」という解答も少なからずあり、語句の関係性が十分に捉え切れていなかったように思われました。また、

handful に引っ張られたのか、「手を使うサイン」や「手話」という誤答が目立ちました。

問 4　前の文脈からどの語句が入るかを判断します。そのためには、それぞれに語句の意味を文中から正確に理解しておく必要があります。
　正解は（ア）です。
　多くの受験者が正しく解答できていました。

問 5　問題に答えるためには、この文章全体の理解が必要となります。ここまで作者の意図を理解しながら読めたかどうかを問う問題です。
　「かつては木の棒で砂の上に絵を描いてコミュニケーションを取った人類が、今では電波望遠鏡で宇宙空間に電波を送って地球外生命体とコミュニケーションを取ろうとしているが、かつての人類同様にシンプルな絵（象徴・形）で伝えようとしている」という内容ですが、後半部分が理解できず、スマホやインターネットについて私見を述べている解答も散見されました。また「説明しなさい」という問題であるにもかかわらず下線部を和訳しただけの答案も多数見られました。総じて、文の構造や語彙は簡単なこともあり、表面的な解釈はおおむねよくできていたと思われますが、文脈の理解ができておらず、的外れな解答が目立ったという印象があります。

大問 3

出題意図

大学生の Josh と Sabrina が授業の履修登録と住まい探しに関する会話をしている文章です。Josh は授業の単位を落とし、Sabrina がこれから引っ越す予定で、二人がお互いにアドバイスをする内容になっています。受験者は内容を理解した上で、適切な意味を持つ表現・文法形式を選択できるかどうか、または、自分が同じ場面にいる際、提供内容を参考にして、自分の意見を適切に英語で述べられるかどうかをみる問題でした。

講評

1)

①会話文の内容から Sabrina が Josh を励まそうとしていることを理解した上で、正しい意味を表す表現を選択できるかどうかをみる問題でした。

正解は（ｄ）です。

②会話文の内容を理解した上で、正しい意味を表す文法形式を選択できるかどうかをみる問題でした。

正解は（a）です。

③会話文の内容を理解した上で、正しい句動詞を選択できるかどうかをみる問題でした。

正解は（b）です。

④会話文の内容を理解した上で、正しい意味を表す文法形式を選択できるかどうかをみる問題でした。

正解は（d）です。

①～③は多くの受験者が正解していましたが、④については、ほとんどの受験者が誤って（c）を選んでいました。stand には他動詞で「我慢する・辛抱する」という意味がありますが、stand with には同じ意味はありません。動詞の他動詞用法と自動詞用法の区別が適切にできるようになることが期待されます。

2) 英語での表現力をみる問題でした。表を参照しながら、その内容と自分の考えを正しく英語で表現し、自分の意見を支持する説明が十分に書けるかどうかを確かめるのがねらいでした。

受験者が一番苦労したところは、文と文の接続ではないかと思います。住まいを選ぶ理由を述べ、別の文で personal detail を述べてはいるものの、その関係が明白になっていない解答が多数ありました。たとえば、I want an

apartment. It has a large space. I have a lot of books.だけを書いている受験者が多数いました。I have a lot of books と It has a large space の関係を述べてほしいところです（I have a lot of books, so I will need a large space など）。また、接続詞を適切に使えていない学生も多く見受けられました（たとえば、The apartment has a large space because I have a lot of books. など）。短い文を繰り返して書くよりも、やや長めの、複雑な文章を書けるようになるための訓練が必要ではないかと思います。

大問 4

出題意図

学問における知の創造をテーマにした書籍『情報生産者になる』（上野千鶴子著）を題材に、オリジナリティとは何かに関する著者の見解が述べられている部分を取り上げました。日本語で書かれた文の意味を理解した上で、語句を並び替えて英文を完成させる問題、和文を英訳する問題、日本語で表現された内容について適切な英語表現を選択する問題を出題しました。

講評

問１　distance from（からの距離）、known information（すでに知られている情報）などの表現も含め、適切な英語で表現できるかを問う問題でした。選択肢の中にある不要な語句を（１つ）除いた上で、正しい語順に並べ替えるためには、動詞として indicates ではなく refers to を採用し、Originality refers to distance from a set of known information.としなければなりません。

このため、正解は、①（オ）、②（ア）、③（カ）です。総合得点とこの問題の正答率の間には、顕著な相関がありました。

問２　「～であるためには」、「教養」、「相反する」、「努力すれば」、「身につける」といった日本語の表現を適切な英語で表現できるかどうか、日本語に込められた意味を文法的に正しい英文で表現できるかどうかなどを問う問題でした。日本語文に使われている「教養」と「オリジナリティ」「センス」は、本文や全体の内容を考慮しなければ正しく翻訳できず、また全体を読んでその意味を考慮する場合は、いろいろな言葉で意訳できるものなので、解答にはかなりのばらつきがありました。おそらく受験者にとっては考えさせられる問題だったと思われます。

問３　「～のほうがまだまし」という日本語の意味を理解した上で、その内容から正しいと判断できる英語の表現を選択する問題でした。この問題を解くためには、著者がオリジナリティと教養のどちらを重視しているかを把握する必要があり、かつ、preferable の意味や、as opposed to の意味が適切に理解できているかどうかも問われる問題でした。

正解は、（エ）です。

【後期日程】

大問 1

出題意図

書籍 The Nature-Nurture Debate: The Essential Readings の第 6 章 How to Succeed in Childhood からの抜粋です。児童期の子供が家庭と家庭外でどのようにふるまうかについて、発達心理学者の視点で書かれた論文からの出題でした。心理学における定説や研究の説明と、それらに関する筆者の意見が論理的に理解できるかを問う問題です。また、米国の移民の子供達の言語文化習得についての説明文を的確に把握する能力を問う問題もあります。前後の文脈から語句の意味を正確に捉えながら、複雑な文のつながりや段落間の論理的展開をしっかりと理解するスキルが重要になります。

講評

問１　児童に求められる（A）first job と（B）second job の違いを明確に説明した上で、どちらがより重要であると筆者が述べているかを説明させる問題でした。筆者は（A）の家庭での円満な人間関係も大切であるが、長期的に見た場合、（B）の家庭外での行動や同年代の児童とのつき合い方を学ぶことの方がより重要になってくると指摘しています。後続の段落では、他の心理学者の異なる見解が紹介されていますが、筆者の意見と区別して読み取る力が必要になります。

(A)と(B)の指す内容については、ほとんどの受験者が正しく理解できたようですが、やはり、多くの受験者が overshadowed in importance の解釈に戸惑ったようで、結果として、(A)と(B)の関係を「A が B に直結する、A のほうが重要である、同じくらい重要である」などと誤解している答案が多数見受けられました。また、siblings を「親戚」、expect を「予想・予測する」と書いた答案が目立ちました。また、第 3 段落 2 行目の and は、何と何を等位接続したものかについて前後の文脈から正確に理解できるような読解力や、in the long run という副詞句があることから(A)と(B)の間には時間的な隔たりがあることなどを読み取る能力を養うことが期待されます。

問２　乳児を対象とした実験の説明文を具体的かつ正確に読み取り、実験の概要（実験方法と結果、考察）を論理的に説明する能力を問う問題でした。2 回実施された実験の条件と結果の違いを明確に説明し、その知見をキーワード（a warning label）をおさえながら的確にまとめることが求められます。

ここでは、本文の第５～７段落から、実験内容（メソッド）、２つの結果、結果に基づく知見を正確に読み取り、説明する力が求められます。全体の趣旨は理解していたものの、ところどころ、説明や理解が不足している解答が散見されました。たとえば、「どのような実験か」の説明では、「モビールのリボンを乳児の右足首につなげる」という部分で誤答が目立ちました。また、実験の条件を変える前と変えた後の結果の違いは理解できていたようですが、条件を具体的にどう変えたのかの説明ができていない答案も少なからずありました。実験結果から「どのようなことがわかったのか」の説明では、第７段落の内容を踏まえて解答する必要があります。実験結果の記述で終わっている解答もありましたが、多くの受験者は概ね趣旨を理解できていたという印象です。

問３　（D）は児童の発達心理学的研究を指しますが、後続の段落までその内容が続いています。この該当段落を正確に読み取り、問３の各選択肢の記述が本文の説明に即しているかを判断する問題でした。ここでは、児童は家庭と家庭外では行動様式が異なっている点に関して、多くの事例が紹介されています。それらの事例を正確に読み、筆者の意見を的確に理解する能力が問われています。

（エ）が正解です。これは、本文の第１０段落１行目の英文（Children learn separately how to behave at home and how to behave outside the home, and parents can influence only the way they behave at home.）の内容と合致しています。また、すぐ次の英文（Children behave differently in different social settings because different behaviors are required.）から、（ア）の内容は不正解となります。第 9 段落の 2 行目以降の英文（a baby with a depressed mother behaves in a subdued fashion in the presence of its mother, but behaves normally with a caregiver who is not depressed.）では、相手によって変わる乳児の行動が示されているため、（イ）も不正解であると分かります。第 9 段落では、家庭内での兄弟姉妹の関係性は、家庭外では異なることもある点が指摘されているため、（ウ）は本文の記述と食い違っています。

問４　最後の段落（第 11 段落）全体の文章の論理的展開を正しく理解できているかを問う問題です。ここでは、米国の移民の児童が２つの文化と言語環境で育った場合について説明されています。初めはバイリンガル、バイカルチュラルで育っても、次第に家庭（親）の言語と文化よりも家庭外（同年代の児童）の言語と文化の方が優勢になる点が指摘されています。

ほとんどの受験者が、家庭と家庭外の２つの言語や文化の習得が変化していくことについて、（変化があるということを）把握できていました。また、徐々に家庭外の世界が優位になるということを、多くの受験者は捉えていたようですが、２つの異なる言語や文化が同等ではない（別の世界である）点を書いていない答案が多数ありました。また、妥協でも２つの世界の融合でもないということを書けていない受験者も多かった印象です。

問５　（1）～（4）の語句を含む英文と前後の文脈から、それぞれの意味を正確に把握できるか、そしてその類義語を理解できるかを問う出題でした。
(1)の正解は、（イ）（elaborate は「手の込んだ」の意味）、
(2)の正解は、（ア）（dominate は「支配する」の意味）、
(3)の正解は、（ウ）（precedence は「優先」の意味）、
(4)の正解は、（エ）（carried out は「実行した」の意味）
でした。
特に(1)の正答率が、他の 3 問よりも低かった印象です。

大問 2

出題意図

宇宙生物学という、地球外の生命の存在の可能性を学術的に検証する学問領域を紹介する書物から、金星にかつて生物と海が存在していた可能性を検証している箇所を抜粋しました。難解な専門用語も多いですが、入学試験として問うているのは、専門的な話題を具体例や一般的な語彙にかみ砕いて説明している箇所を読み解く英語の力が身についているかどうかという点です。

講評

問１　専門用語をその後に続く記述で一般的な語彙を用いて説明していることが理解できているかどうか、という点が前提となります。その上で該当箇所のくだりにおける第 5 文型の make と so that 構文の組み合わせが理解できているかどうか、といった構文の理解がポイントとなります。

実質的には下線部の後に続く２つのセンテンスを訳させる英文和訳の問題で、多くの受験者が該当箇所の英文を把握した上で大意を捉えた答案を作成できていました。make と so that 構文の組み合わせも、きちんと訳せていました。ただし、limit を「制限」とする答案や、property を「割合」（proportion の勘違いか？）とする誤訳が目立ちました。

問 2　指示代名詞の指す内容を説明させる形で文脈の理解を問う問題です。金星の地表がクレーターの残る層の上に溶岩だった層が重なっている理由を説明している文脈で、前のセンテンスの金星のくだりを指していることがわかるかどうかがポイントとなります。

「内部が高熱になり、いたるところで溶岩が噴出する」の部分は多くの受験者が理解できているようでしたが、periodically は「長い時間をかけて」「一気に」など誤訳が多く、「定期的に」「周期的に」と書いている受験者は少なかったようです。また、Venus を火星、木星などと誤訳している答案がかなりありました。全体的にパーフェクトな解答は少なく、多少誤りはあるが何とか概略は理解できているという程度の解答が多かったように見受けられました。

問 3　問題文の論旨を正確に理解しているかどうかを問う問題です。

正解は、（イ）と（オ）でした。

(ア) 第 1 段落の記述に関する選択肢。Volatiles の例として二酸化炭素が上がっているくだりの内容が理解できているかがポイントとなります。問題文が仮定法で現実に反する仮定の話をしているのに対し、選択肢は事実

の話としている点が誤りです。

(イ) 第 1 段落の最後のセンテンスで、金星に存在する水の由来に関する推測のくだりが理解できているかがポイントとなります。

(ウ) 第 3 段落における暴走温室効果のくだりにおいて、具体的な数値を挙げる説明の文意を理解できているかがポイントとなります。選択肢は less than の部分が誤りとなります。

(エ) 第 3 段落において、地球が金星の軌道上に存在するという仮定を立てて話を進めている点を理解できているかがポイントとなります。選択肢は金星が地球の軌道上にあるという仮定について述べているので、本文とは異なる話で誤りとなります。

(オ) 第 5 段落において、地球に生命が存在していた可能性の条件に関する段落冒頭の記述を理解できているかがポイントとなります。

(カ) 第 5 段落と最終段落の内容の理解を確認する選択肢です。第 5 段落の tricky という形容詞と対応し、最終段落で生命が存在した可能性の根拠となりうる痕跡を探すための手順が、難しいことではあるが不可能ではないこととして示されていることが理解できているかがポイントとなります。選択肢は“any hints would be too hard to detect”と不可能なことであるとなっている点が誤りとなります。

受験者の正答率は、さほど高くはありませんでした。

問４　文脈に適した前置詞を選ぶことができるかどうかがポイントとなります。

正解：①（エ）、②（ア）、③（ウ）、④（イ）

多くの受験者が、よくできていました。

問５　自分の考えを正しく英語で表現し、自分の意見を支持する説明を十分に書けるかどうかをみる問題です。

受験者は大体、理由を２つ述べていました。ただ、各理由の裏付けができている受験者もいましたが、理由と裏付けの関係が明瞭でない受験者もいました。また、文がしっかりと書けていた受験者もいれば、ごく短い文で書いていた受験者もいました。文が長い程いいという訳ではありませんが、Exploring other planets is important. There are many people on the Earth. や、There might be resources in space. Humans need more energy.など、短い文ばかりだと、理由とその裏付けの関係や意見と理由の関係が通じないことがあります。

大問３

出題意図

日本の「安価できめ細かなサービス」について論じたエッセイを題材に、日本語の意味を理解した上で、それを適切に英語で表現する力をみる問題でした。

講評

問１　日本語を正しく読み取った上で、文法的に正しい英文を組み立てる力を問う問題でした。

正解は、①（イ）、②（キ）、③（オ）でした。

いずれの受験者も、よくできていました。

問２　「それなしで十分生活が送れる」、「その意味で他の先進国にない」といった日本語の表現を適切な英語で表現できるかどうか、日本語に込められている意味を文法的に正しい英文で過不足なく表現できているかどうかなどをみる問題でした。

問題文はそれほど複雑な文ではありませんが、どのような英語の構文に訳すかをしっかり考えて取り組む必要があります。「その意味で」でつながる前半と後半がどのような関係にあるかを捉えきれていない解答が目立ちました。「過剰なサービス」や「他の先進国にない」のような表現はよくできていました。

問３　日本語を正しく読み取った上で、英訳として最も適切な文を選ぶ問題でした。

正解は、（ウ）でした。

いずれの受験者も、よくできていました。

〇志願者へのメッセージ

本学の長文問題の最近の出題傾向は、分量は比較的多いものの、内容的には読みやすいものになっています。ただし、ある程度抽象度の高い長文ですから、英文の構造を正確に把握し、設問の要求に合わせて必要な情報を取り出し、これを適切な日本語として作文する能力が必要となります。高度な読解力を身につけるためには、一定量の英文を読み、全体の内容を短時間でつかむという訓練をできるだけ多く行うと同時に、正確な文法的知識と豊富な語彙力に支えられた正確な読解を行う訓練も必要です。このためには、前期試験大問１の素材に例示されるような現代的な課題についての英文を読んだり、それを基に自分の考えを英語で述べるといった訓練を、日頃から習慣づけることが大切です。

いわゆる四技能を重視する英語教育の結果、英語によるコミュニケーション能力は以前に比べて伸びてきているのかもしれません。しかし、その中にあっても、外国語である英語で書かれた文章を正確に読み、自分の考えを正しい英語で論理的に表現するという点をおろそかにすることはできません。今回も、英文読解の問題への解答の中には、与えられた英文を知っている語彙で無理に直訳したり、英語の文法を踏まえずに感覚的に捉えた内容を日本語で表現していると思われる答案が多数見受けられました。そういう解答の多くは、主語と述語の関係が崩れてしまい、日本語として不明瞭な解答となっていました。また、自由英作文の問題への解答の中にも、短文を並列するだけで論理関係が不明瞭なものや論理的につながらない英文になっている答案が多数見受けられました。解答を終えたら最後に自分の書いた文が筋の通る日本語や英語になっているか、自分の意図した意味を表した文に本当になっているかを点検してほしいものです。英文の内容や問題のポイントをつかむことができても、答案を適切に作成するための日本語と英語の表現力が十分でなければ得点につながりません。

近年は、電子辞書の普及やインターネットの影響により、日本語の漢字が正確に書けない、英単語の正しい綴りが書けないなど、ことばに関する正確な知識を記憶していなくても済む傾向が強まっていますし、読書を通じて優れた日本語の論説に触れる機会も減っているのではないでしょうか。しかし、英語を書くにせよ日本語を書くにせよ、正確な文字と論理で表すことで相手に自分の考えを誤解なく伝えたり説得したりする能力は、英語力の涵養とは別の次元ですべての人に必要な共通基盤能力です。過不足なく誤りのない答案を書くという技術

は、たとえ母語であっても簡単ではありません。日頃の訓練がものをいいます。要は、母語であれ、外国語であれ、ことばを大切にする読み方、書き方ができているかという点を十分に意識しながら英語の学習をしてほしいと思います。

また、英文を読む、答案を書くといった限られた時間での言語活動においては、丁寧に書く、誤字脱字をしない（英語であればスペルミスをしない）など基本的な注意事項の他に、文法的な表現力を養うことも重要です。英作文の場合に起きる基本的な文法事項でのミス（たとえば、主語が 3 人称単数で現在時制の際は動詞に“s”をつけるといった初歩的な点）は、ほんの少しの注意力があれば防げるはずです。また、今回は、採点者にとって非常に読みづらい文字（小さい字、薄い字、乱雑な字、アルファベットのａとｕ，ｔとｉなどが判別しづらい文字）で書かれた答案が例年よりも多いとの指摘が複数の採点者から寄せられました。結果として受験者本人が損をする結果になりかねませんので、他者に見てもらう解答であるということにも注意してほしいと思います。

最後に、これは高校生にはやや高望みな要望かもしれませんが、英語らしい表現と日本語らしい表現の関係性を理解した上で、それを英文和訳や和文英訳の表現に活かすという訓練もしてほしいと思います。直訳がすなわちわかりやすい翻訳になるとは限りません。たとえば、failure of A to do とか inability of A to do といった英語に特有の名詞を中心とした構文は、それぞれが日本語ではどういう日常的な表現に対応するのか、といったことを日頃から意識的に考えておくだけでも、ずいぶんと英語の四技能は高まるのではないかと思います。